

第2回沢登り講習会 金山・坊主川

【報告者】Y川

【日時】2018年6月24日

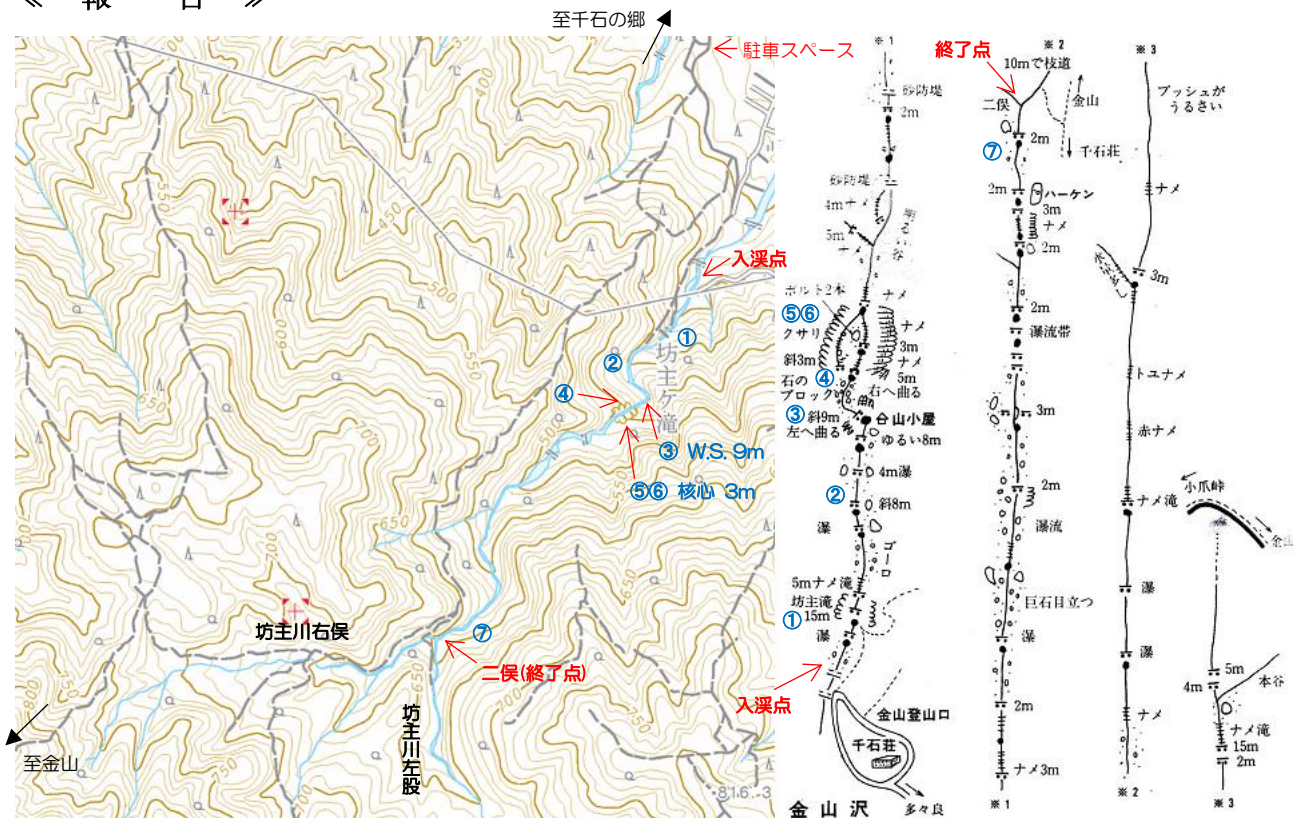
【天候】晴れ

【参加者】A本(CL) Dr(SL) I藤 Y中 F谷 K田
H田 A山 Y川(記録) (9名)

《コースタイム》

07:30 日銀前集合 08:30 千石の郷上の駐車場 09:00 入渓点にて懸垂下降の復習
09:45 遡行開始 10:00 坊主ヶ滝 10:40 ウォータースライダー斜 9m
11:50 核心・残置ハーケン 3m 14:15 二俣(遡行終了) 15:00 駐車場(登山終了)

《 報 告 》



梅雨の晴れ間に恵まれた第2回沢登り講習会の報告を行います。20日の例会時は参加者4名でしたが、晴天に誘われてか9名という大所帯での実施となりました。幸い、他パーティの入渓はなく、ゆっくりロープを出しながら遡行することができました。

本日のフィールドは、背振山系金山に突き上げる坊主川です。小滝の連続する沢で、坊主ヶ滝や堰堤の巻きも容易です。下山は登山道を利用できるうえに、入渓点に戻ればすぐに温泉があるという便利の良さ。しかも天神から車で40分。ここまで条件の揃ったフィールドは関東や関西にはないので、改めて福岡の素晴らしさを実感します。

この第2回講習会の目的の一つは、第1回講習会でレクチャーを受けたロープワークを沢で実践し

てみることで。まずは入渓前に懸垂下降の復習から。林道上の立ち木を支点に、両手を離しても OK というバックアップ付き懸垂下降の基本スタイルを確認します。さらに、Dr による肩絡み・半マスト・カラビナ 2 枚を使った懸垂下降デモを見学します。

40 分ほどの復習を終え、いよいよ入渓です。まずは沢歩きの基本ー飛び石伝いにアップダウンを少なくして歩くと疲れないーについてアドバイスを受けます。水の抵抗がなければサクサク歩けるという当たり前の話ですが、岩の上も滑りそうだし、そもそもフェルト底の摩擦はちゃんと効くのだろうか？いろいろ試しながら感覚を掴んでいきます。

入渓後すぐに坊主ヶ滝 15m が行く手を阻みます。ここは右側をサクッと巻きますが、その前に滝水で禊をします。新人の儀式か、はたまた煩惱の払拭か①。

坊主ヶ滝を巻いて再び沢に戻ります。ここから先は小さな滝が連続します。先輩方のお助け紐を頼りにしながら、水流沿いを果敢に登ります②。坊主川の名物はウォータースライダの斜 9m です③。左岸に朽ちた山小屋があります。落ち口から滑ると、途中でポーンと打ち上げられて、釜にドボンします。両手をバンザイして滑ると、肘を岩にぶつけずに済みます。釜も 1.5m ほどの深さがあるって安心です。スラブ滝を登る練習にも良いと思います。

ウォータースライダー斜 9m を越えると 5m 程の滝です。ここは Dr が水流の左側をリードで登ります④。いったん水流をトラバースして右を登った方が簡単のように見えますが、実際登ってみると、水流の左側には程よいクラックがあるので、それを使えば容易でした。

ここから谷の両岸が狭まり、本日の核心部・残置ハーケンのある 3m 滝です⑤⑥。ここは斜度があるうえに滑りやすく、ホールドも少し見つけにくい感じがします。ここは F 谷さんがリードで登ってくれましたが、プレッシャーがあったと思います。なお、壁の右側には槌状 3m もあります。傾斜は槌状の方が遥かに緩いですが、水量が 2:8 くらいで押し戻されそうです。

核心部を終えると低い堰堤が二つあります。どちらも右から容易に巻けます。ここから二俣までは平凡かなあと思うのも束の間、再び小滝が連続します。もう 12 時を過ぎて、少し疲れも出てきていますが、落差が小さいので、なるべく水流沿いにルートを取ります。脇から登れば何の苦労もないですが、小さな滝でも積極的にトライしていくことで、滝を越える力は身についていくと思います。



①笑顔で行水する
H 田さんと A 山さん

2018 06 24



②水と格闘する
Y 中さん



③スライディング
中の F 谷さん

2018 06 24



④CS で中間支点
をとる Dr

2018 06 24



⑤リードで登る F 谷
さんと確保する Y 川

最後はテーブル状 1m で全身を濡らして(⑦)、二俣にて遡行終了です。遡行の直線距離は 1km 程度でした。装備を解いて、二俣から登山道を 30 分も下れば最初の駐車場に着きます。千石の郷で身体に染み付いた沢臭を取り払い、反省会をして解散しました。

本日の坊主川は晴れて水量が多く、夏らしい沢を楽しむことができました。小滝は水流沿いを積極的に攻めたので、最初の講習会としては少しタフな感じもしましたが、全員が無事下山できて良かったと思います。

反省点は滝の登攀後にセルフビレイをあまり取らなかったことです。登り切って油断したところで足をすくわれるというパターンにはまらないためにも、積極的に声掛けをして、セルフビレイを取り、一つ一つの登攀を確実に終えて、次に進む姿勢を徹底していきたいと思います。

坊主川は巻きも緩く、途中で遡行を打ち切ってしまったので、泥とは無縁でした。沢登りにおける泥、すなわち高巻きと稜線への詰め上げが次回以降の新しい課題でしょうか。どちらも読図力・詰め上がる際のルート取り・藪漕ぎ・高巻きからの懸垂下降など、大事な要素を含んでいます。

日本には本当に色々な溪相の沢があります。コバルトブルーの淵を延々と泳ぐ沢、一戸建てくらいの巨岩帯が続く沢、柔らかな苔で覆われた緑色の沢、井戸の底のような絶望的なゴルジュ帯、20km を越える長大な本流遡行、そして標高 2000m を越えた高山の沢。そこには、踏み跡のしっかりした登山道からは見ることのできない素晴らしい景色があります。パズル要素の強い核心部通過のプランニングや、焚火を囲みながら沢中で夜を過ごすことも沢登りの醍醐味であると思います。

このような沢の楽しみを享受するためにも、まずは今回の講習会で勉強したこと一沢歩きの基本やロープワークを復習して、ブラッシュアップしていきたいと思います。今回の講習会を企画し CL を務めてくださった A 本さん、積極的にお助け紐でフォローしてくださった Dr、たくさんの写真を撮ってくださった I 藤さん、そして一緒に登ってくださったメンバーの皆様、ありがとうございました。最後になりますが、本山行を支えてくださったピナクルの皆様、留守宅のマサさん、ありがとうございました。

